

第2節 宮田館遺跡周辺の縄張りについてー縄張り調査から見てくる宮田館跡ー

小山 彦逸

はじめに

青森県埋蔵文化財調査センターからの依頼で平成20年12月4日に宮田館遺跡の現地踏査を行った。

今回は縄張り調査ということで、現地踏査を行い地表面観察によって残っている遺構を読み解き、それを図化していくという作業手順で行った。

縄張り調査とは、ご存知の方も多いと思うが、あくまでも肉眼で確認できる遺構を読み解き、図化しながら城の防御機能などを推測し、そのことから城館跡の性格や用途を考えるというものである。そのために、さらに細かな解明を補うためには発掘調査なども当然必要となってくる。そのことをあらかじめご理解していただきたい。

1 宮田館遺跡の立地と概要

宮田館遺跡は青森平野の東端、青森市中心部から東に約8.3kmの丘陵地に立地している。

宮田館遺跡は、「鞍越山」と地元の人たちが呼んでいる山頂にあり、鞍越山のことを「クラヌシ山」とか、「クラグシ山」^(註1)、「エゾオジ山」と呼び、空堀が二重に回されている山なので鉢巻山^(註2)とも呼ばれている。

また、東岳は古代に修験者のいる山坊「阿津摩岳千坊」と関係がある^(註3)、とも言われている。

2 縄張り調査の成果（図1）

宮田館遺跡を踏査して作成した縄張り図が図1である。

宮田館遺跡の縄張り調査から言えることは、まず宮田館遺跡と考えられている範囲は西側の丘陵地先端部分と東側の山頂部分の2箇所が考えられていた。便宜上、西側の丘陵地先端部分をA空間と呼称し、東側の山頂部分をB空間、B空間の北側部分をC空間とし、B空間の東側部分をD空間と呼称することとする。

（1）A空間（西側の丘陵地先端部分）

A空間は、現在耕作地として利用され、平場と考えられる段差は祠がかつて置かれていたと言われる場所から段々と南側に構築されていっている。段差の高低差はおよそ2～4mほどで、一見すると戦国期城館の曲輪のようにも見えるが、耕作されている地表面に見られる火山灰の露出状況や、段差を作り出している切岸部分を肉眼観察した草花の生え具合などを見る限りにおいて、最近の開墾によって作り出された切岸や平場のようにも見え、時期の断定はできなかった。

A空間の東側に幅が3mほどの空堀（a堀）とA空間の中央にb堀と思われるものが見られた。b堀については、農作業道のようにも思われ、堀跡と断定することはできなかった。a堀についても堀底と考えられる部分に重機が通ったように跡が見られ、積極的に堀跡と断定することはできなかったが、a堀の西側に土塁状の高まりが設けられており、堀跡であった可能性も否定できない。ただ積極的に堀跡であると断定することもできず判断に苦しむところである。

（2）B空間（東側の山頂部）

標高およそ100mの山頂部を中心に、2本の空堀（c堀・d堀）が設けられている。規模は東西約70m、南北約50mである。c堀のすぐ外側は堀跡を構築する際に堀から掻き揚げられた土砂を盛って作ったと考えられる土塁が見られ、その土塁がひとつの結界のようになっていると言える。ただ、北側の一部がパツクリと口を開けたように途切れている。この土塁が途切れた部分が、このB空間に入るための進入口と考えられる。この進入口から入って左右に傾斜があり、その傾斜を登るようにして入っていくと進入口2に辿りつき、そこからB空間

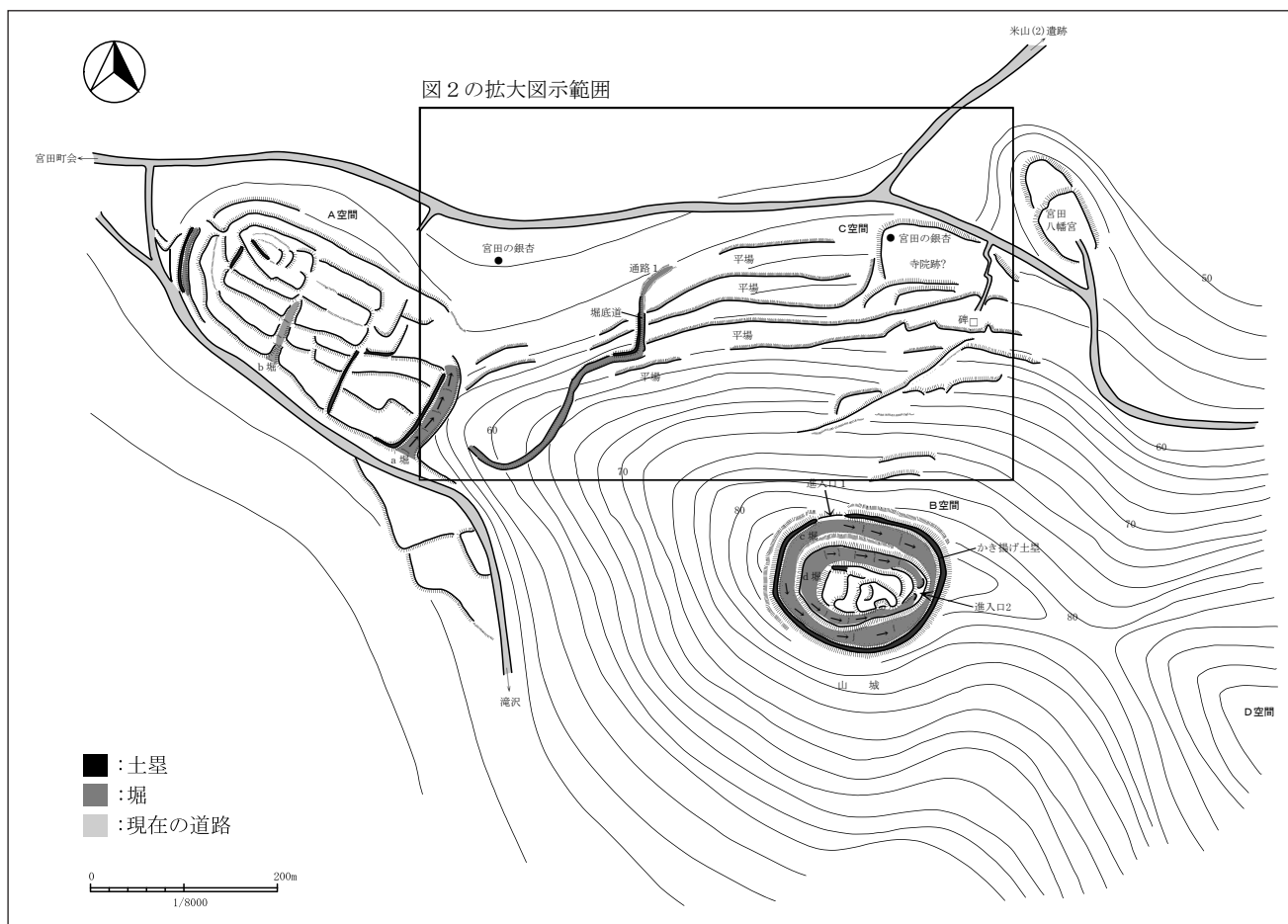


図1 宮田館跡（仮称）の縄張り図

の中心部に入っていくこととなる。B空間の中心部内には不規則な平面形の平場が3箇所ほど見られるが、整地されたという状況でもなく日常の居住空間ではないと考えられる。どちらかというとき非日常的な場所であったと推測される。

ただ、明らかに言えることは、このB空間の堀跡や土塁は最近に作られたものではなく、少なくとも中世か、それ以前に構築されたものと推測される。

(3) C空間 (B空間の北側部分)

この場所は宮田の銀杏の巨木が2本、約350m離れて点在しており、その南側に遺構が構築されていることが確認された。当初はこの場所には遺構はないのではないかとされていたが、現地踏査をしたところ、斜面の土砂を切り崩し、切岸とし、その土砂を押して聖地して曲輪を作り出している。特に特筆されることは通路1とした場所は法面に直角に通路を堀底道状にして作り出し、途中で90°の角度で西側に道を折って作り出しているという点は、この宮田館跡の用途を考えた時には貴重な手掛かりとなるものである。そしてこの通路は途中から南側に蛇行しながら作られ、途中で道は途切れるが、おそらくA空間のa堀に関連していくのではないかと考えられる。

宮田銀杏の東側の周辺には「宮田山寺地主謝霊慰霊之碑」などの標柱があり、地元の人たちの言い伝えによると山寺があったと言われている。現地踏査をした限りにおいても、山寺などの寺院が作られていたような空間を想定される遺構も見られる。

この空間は、寺院など構築され、なおかつ通路1でもあるように、その中を歩く人が精神的に凄くと思うよう

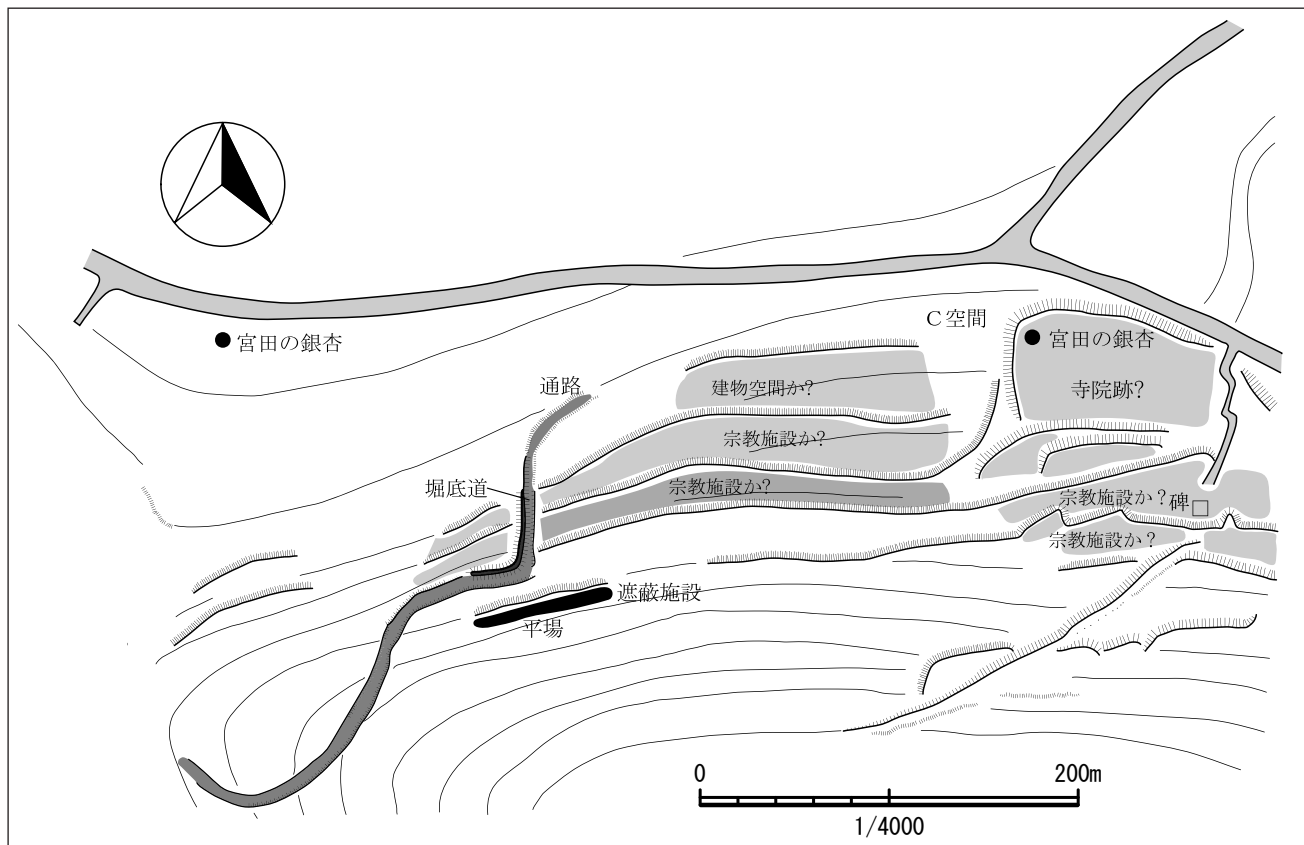


図2 寺院跡と思われる部分の概念図

写真1 宗教施設と思われる平場群
(斜面上方(南)から)写真2 通路と思われる堀状のくぼみと土塁
(遮蔽施設?の上位から)

な装置をこの空間は演出しているように感じられる。

(4) D空間 (B空間の東側部分)

この場所は、B空間に隣接している場所で、城館跡として利用する時には、なんらかの遮蔽施設の遺構などがあるのではないかと考えて現地踏査を行った。この場所から東側に500mほど尾根伝いに現地踏査を行ったが、残念ながら、遺構と断定できるものはなかった。

3 縄張り調査から導きだされる推測

(1) 根小屋式城館の可能性は

当初、宮田館遺跡と呼ばれるものはA空間とB空間からなる、戦国期城館に見られる、根小屋式と呼ばれる、平地に居館（A空間）があり山頂部には立て籠もるための山城（B空間）が設けられるというものではないかとも推測していた^(註4)。

しかし、縄張り調査においては、A空間が城館跡であったとい可能性は、前述したように低いと判断されることから、この仮説は成り立たないものと考えられる。

(2) 築城技法から見た見解

次に考えていたことは、築城技法の中に「南部氏」と「安藤氏」のどちらかの特徴を持っているのであれば、そこから類推できるのではないかと考えたが、A空間がもし城館跡であったとするならば、空堀を掘り切る状況などを見る限りにおいては南部氏の技法に近く、B空間はどちらかと言えば、伝尻八館跡^(註5)などに見られる安藤氏的な技法があるように見えなくもない。しかしA空間は現地踏査をした限りでは、城館跡と考えるには現段階では難しい。またB空間は、安藤氏的とは言えなくもないが、平内町内や、周辺にある戸崎館跡や後泡蝦夷館跡などとの関係もあり、すぐには安藤氏に関係したものとも言えない。結局、決定的な特徴が見出せないというのが結論となる。

(3) 築城技法から見たもうひとつの仮説

そのようなことから大胆な仮説となるが、C空間の寺院跡と考えられる空間や通路1がここを通行する人たちに意識的に見せびらかすという意識で作られていたとも考えられることから、権威の象徴的なものとして作られた施設ではなかったかとも考えられてくる。

もし本格的な城館であるならば、C空間の平場はB空間の西側や南側にも設けられるのが一般的であるが、あえてそこまでやっていないということは、やはり見える部分だけに手を加えているということになるのではないだろうか。テレビや映画の舞台装置のようなもので、見える部分だけを豪華に拵え、その後ろにはほとんど手を加えないという意識と同じ発想の中で作られた可能性も考えられる。

見せびらかすという意識で作られる城の代表的なものは秋田県男鹿半市にある脇本城跡（国史跡）や秋田県能代市の檜山城跡（国史跡）などでも見られる技法のひとつである。ただ脇本城跡や檜山城跡に比べて宮田館跡の規模は小さく、それらの城館跡と比較してよいかどうかという問題もある。

もうひとつ考えられることは、未完の城館跡ということも考えられなくもないが、未完のままで放置したという時には、やはり社会的な背景がどのようなものであったかを考えなければならなくなってくる。

(4) 寺院等の宗教施設の可能性

やはりもっとも有力な推測は、『青森市史叢書1 民俗調査報告書第一集』の第7章信仰の第一節の社寺跡で詳しく述べられているが、修験寺院の跡があったという伝承、そして石塔婆などもあり、銀杏の巨木が2本も現存しているということから、中世の社寺跡の空間として利用されていた可能性が最も高いのではないかと考えられてくる。

青森県内で類似する遺跡としては、深浦町の折曾之関跡^(註6)や七戸町の五庵川原跡^(註7)などが挙げられる。これらも伝承では社寺跡があったとされ、そして銀杏の古木が現存しているなど極めて同じ構成要素を持っていると感じられる。

余談とはなるが、銀杏の古木は中世の寺院と密接な関係があり、そのような条件も宮田館遺跡と呼ばれるこの地域周辺にはあるように感じられる。

4 若干のまとめ

頁数の関係で、今回の調査成果を要約すると下記のようにことが言える。

①宮田館遺跡とされているが、前述してきたように、城館跡というよりも寺院等の宗教施設が張り付いた、宗教遺跡^(註8)ではなかったのか。

②山頂部の二重の堀跡と丘陵地先端部のC空間とは、時期的に重複するのかどうかは今後の検討が必要となってくるが、時間差があると考えられる。

③C空間からA空間に向かって作られた、堀底状の通路は近世よりも古い時期に作られたもので、そのことから交通路の問題が浮上してくるのではないだろうか。

④B空間が城館跡として構築されていたとするならば、東側のD空間にはなんらかの遮蔽施設が作られると考えるが、そのような施設が見られないことから、城館跡とは積極的には言えないのではないか。

おわりに

中世城館跡の縄張り調査は、あくまでも現時点で確認される遺構を図化しながら、城館跡の用途や機能、性格、階級などを知る手掛かりとはなるが、今回の縄張り調査では宮田館遺跡とされているものが城館跡と解釈するには、あまりにも難しいと考えられる。

青森市刊行の『青森市史叢書1』には、山寺があったとする伝承が残されており重要な鍵となると思う。さらに、現存している銀杏の古木と寺院跡の関係などは、県内の類例と考えあわせても貴重な判断材料になるのではないかと考えられる。

いずれにしても、この周辺での埋蔵文化財発掘調査の成果などと照らし合わせながら、広い視野で宮田館遺跡とされる遺跡を考えていくことが必要である。

【註】

- ・ 註1 青森市刊行の『青森市史叢書1 民俗調査報告書第一集 矢田・宮田・滝沢の民俗』（1999年）に記されている。
- ・ 註2 『新青森市史 資料編2 古代・中世』を参照していただきたい。
- ・ 註3 青森市刊行の『青森市史叢書1 民俗調査報告書第一集 矢田・宮田・滝沢の民俗』（1999年）に記されている。
- ・ 註4 『新撰陸奥国誌第一巻』によると、宮田村の近くに「根小屋村」という村があり、根小屋村を大根小屋と呼んで、今の諏沢村の小字根小屋を小根小屋と呼んでいたという。このような地名は中世城館の存在を窺わせるような気がするが、今後の検討課題となる。
- ・ 註5 『新青森市史 資料編2 古代・中世』青森市刊行を参照していただきたい。
- ・ 註6 深浦町教育員で調査を進めてきた「折曾之関跡」の縄張り調査において、高知大学教授の市村高男氏が指摘していることで、古寺と銀杏の巨木には密接不可分の関係があると指摘している。銀杏の葉のDNA分析によると深浦町の銀杏と鎌倉の銀杏のDNAが類似しているとの報告もされているという化学分析結果も示されている。
- ・ 註7 『中世糠部の世界と南部氏』（2003）七戸町教育委員会刊行の中で、市村高男氏が「中世七戸から見た南部氏と糠部」の中で、銀杏の木と寺院跡についても詳しく述べられている。
- ・ 註8 青森市刊行の『青森市史叢書1』の中で菅江真澄の「栖の木」の寛政8年（1796）の条に「…略…寺のありしあととおぼしくて、五百とせよりこなたの石塔婆あまたふしまろび、…略…近きころこの畠中より、こまで（高麗手）の陶皿あまた堀得しといふ」などのことから、中世時期の寺院跡の可能性が垣間見られる。